

段玉裁晩年における理学尊崇の問題について

若松 信爾

九州女子大学 共通教育機構
北九州市八幡西区自由ヶ丘一―一(〒八〇七―八五八六)

(二〇一四年一月一三日受付、二〇一四年二月一八日受理)

はじめに

段玉裁(一七三五―一八一五)が晩年において理学に傾倒していたことは、蘇肇輝氏の「跋激秋館旧藏段若庸先生手札―兼述段氏晩年學術思想」や、吉田純氏の「段玉裁の経学―学問と生涯―」等の論文で明らかにされている。蘇氏の論文は段玉裁のこの問題を、余英時氏の「尊徳性」・「道問学」の立場から説く内在理路の視点により解釈し、また吉田氏の論文では段玉裁の『経韵楼集』所収の文章から分析し、詳細にこの問題を論じており、そこで段玉裁は師である戴震(一七二三―一七七七)とは理学についての捉え方に相違があるという。氏は戴震が理学の「理」を斥け、代わりに「同然」の「理」の把握へと収斂するおのれの学問体系を構築しようとし、彼が理学というものを、あくまで、「理」の学問体系として把握していたといい。それに対し段玉裁の理学における関心は、理学の「理」概念に対してであるより、もっぱら「立身」「気節」「政事」といった、道徳的実践としての面に対してであることに気づく。

と指摘している。

確かに段玉裁晩年の文章を見ると、理学受容に関してはそういう面が見受けられ、考拠学の大家である人物の言説としては意外な一面を見せている。そこで本稿においては、何故段玉裁が晩年にいたって理学に傾倒していったのか、という問題を再度検討するとともに、また、この時期における段玉裁の戴震の学問に対する理解のありかたを考察することで、そこから窺える段玉裁晩年の心境の変化を概観していく。

一、段玉裁晩年の理学に対する認識

段玉裁の晩年における理学に対する認識を明瞭に示すものとして、多くの先学は「博陵尹師所賜朱子小学恭跋」を挙げる。これは嘉慶十四年三月、段玉裁七十五の歳に記されたものである。先

ずこの文章を検討してみる。

嗚呼、此の小學の二本は、乃ち我師博野の吏部侍郎尹公元孚の賜ふ所なり。玉裁生まれて六年、先大父に従ひて發蒙され、七年、論語を讀みて南面の章に至りて、先大父亡す。八年、叔祖父季遜公に従ひて書を讀む。九年先君子に従ひて書を讀む。十年、叔祖父可南公に従ひて書を讀む。十一年より十三年に至までは、乃ち先君子に従ひて書を毘陵連江の館舎に讀む。乾隆丁卯、余年十三にして、先君子授くるに小學を以てす、是年學使者の童子の試に應ず。試の日能く小學四子書・詩・書・易・周禮・禮記・春秋左氏傳及び胡傳を背誦し、尹氏孺子教ふ可しと謂ひ、飯を賜ひ、之に寵異さる。試卷面呈し、面許され泮に入り、面授するに新刻梁谿高紫超氏の注する所の小學を以てす。書を奉じて歸り、先君子及び先孺人喜ぶこと甚だし、線装皮閣し惟謹む。即ち此の本是れなり。⁽²⁾

この部分を見ると段玉裁の修学の過程と童試に合格した際、試験官である尹元孚から、高愈注『小学』の本を授かったことが記されている。

蓋し師の學は朱子を宗とし、尤も朱子の小學を重んず。江蘇

に督學たりて人材を倍植すを以て先務と爲す。諸々の生童に命じて皆小學に熟さしめ養正の功と爲す。坊間行はる所の陳恭愍の注未だ善ならず、惟高氏の注のみ條理秩然として、朱子編輯の本意を得るを以て、重刊頒布して、手づから玉裁に畀ふ。師は蓋し厚望有り。先君子に謂ひて曰く。「此の兒端重、必ず之に教ふれば大器と成らん、自ら菲薄とすること勿れ」と。先君子玉裁に教へるに、時に此の書を擧ぐ。已にして師松江の試院に募す。玉裁二十六に至り、郷に擧られ、都に入り、師の令嗣亨山方伯に謁す、亦勤懇懇望むに小學を以てす。顧みれば自ら振作せず、少壯の時、好みて辭章を習ひ、坐して歲月を耗やす。三十六、乃ち出て縣令と爲り、學ばずして仕えること十年、政事紀す可きこと無し。四十六、先君子已に年七十を過ぎるに因りて、終養を請ふも、未だ例に合せず、遂に疾を引きて歸り、趨侍すること二十餘年。癸亥、先君子見背す、今又七年の所なり。里に歸りて後、人事紛糅し、讀む所の書は、又喜みて訓詁考核を言ひ、其の枝葉尋ね、本根を略し、老大にして成ること無く、追悔するも己に晩し。⁽³⁾

続けて尹元孚の学風を述べる。尹元孚は朱子学者であり、ことさら『小学』の書を重んじていたことが記されている。段玉裁は若年の頃に、この尹元孚の教育に深い影響をうけたことは理解でき

る。そして年七十五歳の老境に至つて、段玉裁は考拠学を儒学の「枝葉」とし、理学（朱子学）を「本根」であるといい「追悔するも已に晚し」と述懐する。段玉裁をしてこの言説をなさしめる所以に如何なる事情があつたのであろうか。

蓋し郷に善俗無く、世良材に乏しきより、利欲紛挐し、異言誼逐す。而して朱子舊聞を集め、來裔に覺し、之に本づくに立教を以てし、之を實にするに明倫敬身を以てし、之を廣むるに嘉言善行を以てす。二千年聖賢の法とす可きは、胥な是に於いてか有り。或いは以爲へらく言ふ所は童蒙の與るを得る所に非る者有りと、夫れ立教・明倫・敬身の大義は、蒙養の時より之を導かざれば、其の長ずるに及ぶや、則ち聖賢の學を以て分外の事と爲さん。我の與り知り與に能くする所の者は、時義の辭章科第のみ。嗚呼、此れ天下人材無き所以なり。或いは又謂へらく漢人の小學と言ふは六書を謂ふのみ、朱子の云ふ所に非るなりと。此の言尤も悖る。夫れ言には各々當る有り、漢人の小學は一藝なり。朱子の小學は蒙養の全功なり。子曰く「弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信、汎く衆を愛して仁に親み、行なひて餘力有らば、則ち以て文を學べ」と。此れ弟子を教へるの法に非ずや。豈専ら文を學ぶが是れ務めならんや。朱子の童蒙を教へるは、本未兼賅し、未だ嘗て孔子の弟子を教へるの法と異ならざる

なり。⁽⁴⁾

この部分において段玉裁は、人心の荒廢は朱子の教えが人々に浸透していないからであり、特に理学における『小学』を幼少の頃より読ませるべきであるという。そうでないと「聖賢の學を以て分外の事」としてしまい、みな科業のみに勤しむことになる。今、天下に人材がないのはこれがためであるという。そして段玉裁は有名な「漢人の小学は一芸なり、朱子の小学は蒙養の全功なり」という文言を記している。つまりこの時点で段玉裁の思想の中では考拠学・理学の關係が、より理学のほうにウエイトを置く構造ができていたといえる。

続いて跋文の最後の部分を見ることにする。

玉裁都に入りてより、黔に至り、蜀に至り、久しく此の本を見ず。巫山に在りて曾て家書を作りて先君子に上り、檢べて之を寄せんことを請ふ。先君子寄せるに他本を以てして、夢寐の間追憶是れに在り。五年前乃ち四弟玉立の架上に於いて之を得、喜び極り繼ぐに悲泣を以てす。蓋し吾師及び吾母吾父の皆逝くを痛み、吾父の我に訓える所以、吾師の鄭重に我に付する所以の者、之を蛛絲煤尾の間に委ね、趙襄子の簡の如く、諸を懷中に探る克はず。塊恨何ぞ極らん。幸ひ吾師の編尚ほ存し、吾父の題字新なるが如し、年老耄に垂とし、敬

謹して繙閲し、其の旨趣を繹めれば、以て平生の過を省み、以て晩節末路に自全を求め、以て吾子孫を訓む。子孫敬み觀て熟讀し、習ひて孝弟を爲せ。恭敬して以て天下の子孫に教える者に告げん。必ず其の根を培ひて而る後其の支に達す可し、時義の辭章・科第を以て自ら晝ら使むる勿れ。此れ則ち小子の微意なるかな。⁽⁵⁾

段玉裁は四川省巫山県の知事の時に、再びこの尹元孚からももらった『小学』を読もうとしてはたせなかつた。乾隆四十三年から四十五年、四十四歳から四十六歳のことである。なぜこの頃そのような欲求にかられたのかは判然としない。因みに段玉裁が巫山に赴く前年の乾隆四十二年に戴震は没している。結局段玉裁がこの書を手取るのは嘉慶十年、四弟玉立の書棚の上でこの本を発見してからである。乾隆四十三年から実に二十七年を経過してのことである。その感激を段玉裁は「喜び極り繼ぐに悲泣を以てす」と表現している。そして現在までこの『小学』の存在を忘却していたことを恥じ、あらためて読んでみると倫理・道德上非常に有益であり、子孫への訓戒とするに足ると述べる。最後に天下の子孫に教えを垂れるものに対して、修学の過程を「必ず其の根を養いて、而る後其の支に達す可し」と戒めている。ここでも「根」

「理学・「支」」考拋学であることを明瞭に示している。この問題に対する先学の論評は後述するとして、以上のような思想が段

玉裁の中で一体いつ頃から形成されていったのであろうか。

劉盼遂編の「段玉裁先生年譜」(以下年譜と略稱す)を見ると嘉慶十一年の項に段玉裁が王念孫(一七四四〜一八三二)に宛てた書簡を引用している。⁽⁶⁾

所謂「王懷祖に与う第三書」の書簡である。劉盼遂はこれを「年譜」で嘉慶十一年としているが、陳鴻森氏は「段玉裁年譜補訂」において書簡の内容からこれを嘉慶十年末とする。⁽⁷⁾本稿でもこれに従うことにする。

弟落魄して無似、時に理學の書を觀る。説文の注近日成る可し、一序を作るを爲さんことを乞ふ。近來の後進は無知、咸以て弟の學は竊に諸を執事より取る者と謂ふ。大序に非ずんば、以て鄙人の得る所を著すに足らず。⁽⁸⁾

吉田氏も此の書簡を以て理学への傾斜の萌芽としている。⁽⁹⁾同年に段玉裁は前述した四弟玉立のところで『小学』を入手していることから考えると、ここでいう「時に理學の書を觀る」とはこの『小学』を指しているとみて差し支えないであろう。続く下文では『説文解字注』の完成が近いため、王念孫に序を依頼しているのである。その理由は当時段玉裁の学説について王念孫の説を剽窃したものではないか、という風評があつたためである。この一文について吉田氏は謙遜の辞と解しているが、⁽¹⁰⁾一概にそうともい

えず、現実にそのような噂があった可能性はある。

翌嘉慶十二年の顧千里（一七六六—一八三五）との論戦中に記された書簡、「答顧千里書」には次のような文言がみられる。

（『経韵楼集』には、この書簡を嘉慶十四年とするが「年譜」は書簡の内容から嘉慶十二年とする。今これに従う。）

顔氏家訓に曰く、「今數十萬の書を読むこと有りて、便ち自ら高大にして、長者を陵忽し、同列を輕慢す。人之を疾むこと讎敵の如く、之を惡むこと鷗梟の如し、此の如くにして以て學び益を求むるも、今返りて自損す、學ぶこと無きに如かず」と。子朱子の小學之を取る。顧涇陽、錢牧翁に誨して曰く、「汝自ら書を読むこと我より多しと謂ふ、書の二本有るも汝卻て未だ讀まず。乃ち小學なり」と。未だ人品無くして能く文章を工みにする者有らず、足下姑く小學を讀め。⁽¹¹⁾

顧千里の無礼な態度に対し、段玉裁は『顔氏家訓』『勉学編』等の文を引用して『小学』を読むようにいう。

続いてこの問題に関して「年譜」に記載されていない書簡が、陳鴻森氏の「段玉裁年譜補訂」に収録されている、嘉慶十三年の王念孫宛の書簡である。

執事尙し解組して、徜徉として蘇杭に至らば、猶ほ床を風雨

に聯ね、共に談じて得る所なり。今日の弊は、品行政事を尙ばずして漢學を剽説するを尙ぶに在り、亦河患と相同じ。然らば則ち理學は講ぜざる可からざるなり。執事其の意有りや。⁽¹²⁾

ここで段玉裁は今日の弊害は、多くの学者が道德や政治に興味がなく、考抛学において互いに剽窃しあうことに腐心していることであると述べ、こういう時だからこそ理学が講じられなければならないといい、王念孫にその気があるかを問うている。この書簡に見えるように「漢学を剽説」ということが、当時の一般的風潮であったのであれば先述した、段玉裁の学説は王念孫の剽窃という噂は事実であったことであろう。

翌嘉慶十四年は前述した「博陵尹師所賜朱子小学恭跋」の記された年である。一月に嚴元照のために「娛親雅言序」を記しており、末尾に以下の文が見られる。

抑余又以爲へらく考核とは、學問の全體にして、學とは學びて人と爲る所以なり。故に考核は心性・性命・倫理・族類の間に在りて、讀書の考核を以て之を補ふ。今の學を言ふ者は身心・倫理之を務めにせず、宋の理學は言ふに足らず、漢の氣節は尙ぶに足らず、別に異説を爲し、後生を簧鼓す。此れ又吾輩の當に大いに之に防ぎを爲すべき所の者なり。然らば

則ち余の久能に望む所の者は、これを以て自ら隘くする勿れ、考核の大に志すこと有るのみなり。⁽¹³⁾

これをみると、当時の学风は理学・考拠学でもなく、ことさらに異説を唱える風潮があつたことが窺える。

嘉慶十五年、「与王懷祖第六書」には意外な文言が記されている。

東原師曾て弟に書を與へて云ふ、僕生平の著述は、孟子字義疏證を以て第一と爲す、人心を正す所以なり。今詳らかに其の書を味わうに、實實として宋儒理學を説くは其の流弊甚大なるを見得ず。閣下曾ち之を執かにし、之を覆ふ可けんや。弟此の書を刻して以て其の傳を廣め、義理を言ふ者をして折衷する所有ら俾めんと擬す。⁽¹⁴⁾

また二年後嘉慶十七年の「十經齋記」にも「吾師の二十一經及び原善・孟子字義疏證を以て、恭みて几上に安んず」⁽¹⁵⁾とあり、これらを見ると、段玉裁は戴震の『孟子字義疏證』を信賴し、特にこの書簡では理学に対して否定的な見解を述べている。嘉慶十五年に段玉裁の思想に如何なる理由がありこのような発言をしたのか、残念ながら徴すべき文献がない。そこで錢穆氏はこの発言をもってこの時点で、段玉裁の思想が理学を否定し、戴震の『孟子

字義疏證』の思想を全面的に受け入れたとする。⁽¹⁶⁾また耿加進氏は『說文解字注』完成の後、段玉裁は『孟子字義疏證』を研究したとし、段玉裁は大いにこれに理解したとしている。⁽¹⁷⁾確かに段玉裁はこの時期『孟子字義疏證』を研究し、その説に賛同したであろう。しかしそこで理学を全面的に否定したであろうか。なぜならば、多くの先学がとりあげてきたように嘉慶十九年、陳寿祺（一七七一〜一八三四）に宛てた書簡をみると、以下のような文面が窺える。

愚謂へらく、今日の大病は洛閩關中の學を棄て講ぜざるに在り、之を庸腐と謂ひて立身苟簡、氣節敗れ、政事蕪れ、天下皆君子なるも、真の君子無し、未だ必ずしも表率の過に非ずとせざるなり。故に専ら漢學を言ひて、宋學を治めざるは、乃ち真に人心世道の憂にして、況や所謂漢學は、畫餅に同じが如きをや。（中略）執事主講として宜く諸生と正學の氣節を講求し、以て真才を培ひ、以て氣運を翼くべし。⁽¹⁸⁾

蘇肇輝氏の見た激秋館旧蔵の手札には右の文章の末尾部分は「執事宜與諸生講求理學氣節、以培真才、以翼氣運」に作るという。⁽¹⁹⁾いずれにしても翌嘉慶二十年、段玉裁は八十一歳を以て没するたため、この陳寿祺宛の書簡が段玉裁の理学に対する最終的結論となる。以上時系列風に段玉裁の理学に対する認識を概観してきた

が、嘉慶十年に『小学』を読み返して以来、途中に動揺はあるものの、理学に対して概ね肯定的姿勢であり、最晩年に至るまで理学に対する信頼は揺るがないものであったことが看取されるのである。

二、段玉裁の理学尊崇に対する後世の解釈

このような段玉裁の理学尊崇の態度について、後世の学者たちはどのような解釈をしてきたのであろうか。以下主だったものを概観していくことにする。この問題について触れたものとして古いものでは、皮錫瑞の『経学歴史』が挙げられる。

戴震原善・孟子字義疏證を作りて、朱子の説經と牴牾するも、亦只是れ一理の字を争辨するのみ。毛鄭詩考正は嘗て朱子の説を采る。段玉裁學を戴より受く、戴を以て朱子の祠に配享せんと議す。(中略)段の極めて小學に精しきの人を以て、漢人の小學を以て朱子の小學を薄んぜず。是れ江・戴・段の學は未だ嘗て宋儒を薄んぜざるなり。宋儒の經説は古義に合せずと雖も、宋儒の學行は古人に愧じず。且つ析理の精は、多く獨得の處有り。故に惠・江・戴・段は漢學の幟志を爲すも、皆敢へて將に宋儒の抹殺をせんとするにあらず。⁽²⁰⁾

確かにこれらの考抛家達は經解の是非を論ずることはするが、理学を撲滅しようという意図はなかったであろう。しかし理学に対する考えかたは惠士奇のように「六経は服・馬を尊び、百行は程・朱に法る」⁽²¹⁾という場合と、戴震のように理学を正面から批判するというような場合もあり、各人により理学に対する温度差があるため一概に皮錫瑞の言説をそのまま受けとめるわけにはいかないであろう。

一九三七年の自序のある錢穆氏の『中国近三百年學術史』において、段玉裁のこの問題に触れた部分をみてみる。錢穆氏は前述した陳寿祺の書簡など引用して以下のように述べる。

懋堂（段玉裁）の一生の精力は、説文解字の一書に注がれた。だからといって、自ら尊大ぶらず、自らは漢人の小學を一芸の學問としたが、その一方で朱子を極めて推称し、その學問は本末を兼ね備え、孔子の教えと異なることはないと言っている。(段玉裁)がこのように考えたことは、誠に深遠なことではなからうか。しかし懋堂がまた東原(戴震)を尊び、朱子と並べて配祠しようとしたことについて考えると、懋堂は結局東原の學問を真に理解していたとはいえない。⁽²²⁾

しかし、一九七六年に発表された錢穆氏の「説段懋堂経韻楼集」

では先の発言とは異なった見解を示している。錢穆氏は前述したように嘉慶十五年の「王懷祖に与う六書」・「十経齋記」等の資料を以て次のようにいう。

懋堂は幼い頃より、程・朱の学の影響を受けていた。老年に至るまで（考拠学と宋学）の両者の間をどっちつかずの態度であったが、七十六歳から八十の歳の間に、始めて東原の説一尊になったのである。これは『経韵楼集』を細読すれば推測することができる。⁽²³⁾

錢氏のこの発言が成立しないことは、陳寿祺宛書簡が記されたのが、段玉裁八十の時であることから実証できることは先に述べた。また、段玉裁が幼い頃から老年まで程・朱の学の影響下にあったとするのも疑問である。「十経齋記」によれば段玉裁自ら以下のように述べる。

余幼き時より四子書を読み、注中の語之を信じ、惟篤からざるを恐れるなり。既に壯にして乃ち疑ふ。既にして六經・孔・孟の言を熟讀し、以て之を四子書の注中の言を覈へ、乃ち其の心を言ひ、理を言ひ、性を言ひ、道を言ふ、皆六經・孔・孟の言と大いに異なるを知る。六經は理は物に在りと言ふも、宋儒は理は心に具はると言ふ。六經は道は即陰陽と言

ふも、宋儒は陰陽は道に非ずと言ひ、理有りて以て陰陽を生ず、乃ち之を道と謂ふ。之を言ふこと愈々精なるも、愈々苦し難し。⁽²⁴⁾

これを見れば、段玉裁は壮年の頃より、理学に疑問を抱いていたことが理解できる。従がって錢氏の説は誤りと言わざるをえない。錢氏は何故先の『中国近三百年學術史』においては陳寿祺宛書簡等を引用しているのに対し、後年の「読段懋堂経韻楼集」ではそれにまつたく言及せず、何故前述の論を展開したのか理解に苦しむ。

余英時氏が「清代思想史的一个新解釈」において「尊徳性」・「道問学」の観点から「内在理路」の法則を提唱したことは周知のことである。この論文から段玉裁に触れた部分を引用してみ

段玉裁が晩年頗る理学を推賞する意思を表明し、平生好んで訓詁考証を言い、儒学の根本的なことをすて、瑣末なことばかりを追求してきたと自らを責めた。これは「尊徳性」の空気が依然として乾・嘉の学术界にあったことを示す好例であり、段玉裁のような考証学の大家でも、自分が「道問学」の立場を追求しすぎたことを懺悔する結果となってしまうたのである。この問題は簡単に処理できるものではない。本来儒

学思想の中心となるものは、確実に道徳性・宗教性的方面であり、しかも儒学の一部分は正にその「尊徳性」の伝統の中に身を寄せていた。しかし清儒の考証の学は儒家の致知の精神を発揚したため、「道問学」と「尊徳性」の概念はしだいに分離していくことは免れなかった。「尊徳性」と疎遠になった「道問学」は当然「世道人心」とは直接関わることはなくなり、また、個人の「成徳」を保証することも事もなかった。乾・嘉の時代は儒家の統一的「道」の観念は未だ解体しておらず、ひたむきに知識だけを求めてきた学者が、書齋から離れた時に自分の専門としていた学問の優れた業績が結果として世の中の何に役に立つのか、自分にとってそれが何の利益になるのか、という懐疑を抱かざるを得なかった。段玉裁のこれと同じような悔恨の発言はこの種の心理的観点から理解されるべきである。⁽²⁵⁾

余氏の論文によれば段玉裁は自己の「道問学」的学問を晩年に悔恨し、「尊徳性」的学問への回帰を訴えたということになる。

一九七九年、蘇瑩輝氏は「跋激秋館舊藏段若庸先生手札―兼述段氏晚年學術思想」を発表し、余氏の論を受けて以下のごとくいう。

最後に余氏は「清代學術の氣運は何故「道問学」に向かつていったのか、それは依然として無数の曲折した事情が存在する」と言っている。私もこの意見のまったく同感である。この問題に解答をするにあたり、余氏のような博學な学者でも、個人の才能と精神のよく耐え得るものではないと謙遜しているが、私もこれに関しては解決することはできない。ただ年来読んできた段玉裁の（陳寿雪苑）書簡に「理學の氣節を講求し、以て眞才を培い、以て氣運を翼くべし」とある文章を読み、再三考えても理解することができなかったが、今余氏の引用する龔定盦の文章を読んで突然悟った。思うに若庸先生言う所の「氣運」は「道問学」を指している可能性が高い。上の文章の「理學・氣節を講求」の語句を以て論証すれば、これは理學氣節（尊徳性）を以て經典を考證する（道問学）の助けとするような風潮を作り上げようとしている。つまり換言すれば、これは「義理を考證のために奉仕させる」というようにみることが可能である。もし以上の私の短見が間違つてなければ、断定はできないが定盦の説はある程度段玉裁の影響を受けているのではないか。⁽²⁶⁾

余氏の内在理路説の基礎には龔自珍（一七九二〜一八四一）の「江子屏所著書序」に述べる「孔子の道は、徳性を尊び、問學に道の二大端のみ⁽²⁷⁾あることはよく知られている。蘇氏はこの

龔自珍の考えのもとには段玉裁の影響があつたとみるのである。

二〇〇九年、張循氏は「漢学的内在緊張」という論文で陳寿祺の「孟氏八録跋」に前述の段玉裁の陳寿祺宛書簡と阮元（一七六四〜一八四九）の書簡が引用されている部分をあげて以下のようにいう。⁽²⁸⁾

段玉裁の書簡の中で「洛・閩・關の學」というのは、これは程・朱・張載などの理学を指しているのではない。其の含意は実に阮元が所謂「聖賢修身立行の大節」といつているのと同じである。陳寿祺が此の二人言葉を並べて論じているのは、彼はこれにより「専ら漢學を言うも、宋學を治めず」と告発し、また当時の学者達の多くが「窮經」に務めて、「進徳」を軽んじていたことをいう。⁽²⁹⁾

ここでいう「窮經」・「進徳」とはそれぞれ「道問學」と「尊徳性」に相当する。そして張循氏は段玉裁のいう「洛・閩・關の學」が程・朱の学を指さず、たんなる「聖賢修身立行」のことを指すとする。張氏はまた注においてこの問題にふれ、前述した段玉裁の王念孫宛書簡の嘉慶十三年と十五年の理学に対する見解の矛盾についても詳論している。

ほとんど同時期といえる時に、段玉裁は（嘉慶十三年には）

「理學講ぜざる可からず」といい、また（嘉慶十五年には）「理學の流弊甚大」と認識している。この矛盾はちょうど彼のこの二箇所という「理學」が同じ概念ではないことを表明している。彼の講ぜざる可からざる「理學」とは、ただ「品行政事」を指すだけのものであり、戴震に批判された真正の宋儒の「理學」は、流弊甚大なもので講じてはならぬものであつた。⁽³⁰⁾

張氏の段玉裁が理学に二重の意味を持たせていたという説は、確かにこの矛盾を解決するためには都合がいいといえる。しかし、果して張氏の主張するが如く、段玉裁が理学に関してこのような曖昧な二重の定義を持たせていたかは疑問である。そうであれば段玉裁自親がその旨明記するであろうし、また書簡中理学と書けばよい部分に取って「洛・閩・關の學」と記している所から張氏の説は成立し難いと考えられる。

二〇一〇年には耿加進氏が「段玉裁晩年之悔原因考析」を発表している。その中で段玉裁の「悔」の理由を三点挙げる。ここでは関係する一・二を以下に鈔出する。

一、戴震は考證・訓詁で当時非常に重んじられたが、しかし、彼が自己の著作の中で一番重要視したのは『孟子字義疏證』であつた。亡くなる一ヶ月前に此の書の重要なことを

(段玉裁)に伝えて、その研究する所の継続を委託するつもりであったが、段玉裁は当時から『説文解字注』の完成に全力を注いでおり、戴震のいう意味をよく理解していなかった。『説文解字注』完成の後、ようやく『孟子字義疏證』を研究し戴震が生前言ったことを理解した。(中略)段玉裁は晩年精力的に『孟子字義疏證』を研究し、その蘊奥を理解したが、ただ(段玉裁は晩年)であったので力つき著述を以てその思想を発展的に広めることができないことを憾みとした。

二、『説文解字注』完成の後段玉裁は考證・訓詁はたんに一芸すぎないだけであり、世道人心になんら被益しないと考えた。その時に尹元孚から授かった『朱子小学』に重要な意義を見出したが、自己に於いての道徳性命の学を確立する力はほとんどなく、その上老齢と貧病も加わり其れ以上成果をあげるがおぼつかないため「老大無成」・「讀書竟無成」と悔いてやまなかつたのである。⁽³¹⁾

ただ耿氏の論文には段玉裁は『孟祖字義疏證』を理解した後は「戴震を尊崇すること甚だ厚く、宋儒に対する批評は多くなつた」⁽³²⁾と述べ晩年の段玉裁の思想は理学一尊とはしない記述がみられる。

日本では一九八五年、吉田純氏が前掲論文でこの問題にふれ氏

も段玉裁が理学を道徳的実践と解釈していることは前述したが、更に「これは段玉裁達の幼年時代に施される教育に在り方に密切な関係がある」⁽³³⁾とも指摘している。次いで一九八九年に井上進氏が「漢学の成立」において、理学について「国家の定めた正学は、決して看板などではない。それは違背を許さぬ原則である」⁽³⁴⁾と述べ、段玉裁のこの問題について、つぎのように述べる。

段玉裁など「考覈とは学問の全体である」とまで言い、もう少しで新たな「考覈」の学に到達しそうであった。しかしこの「考覈」の学における義理を考える時、彼の口から出たのは「宋の理学は言うに足らず」などと言って、別に異説をたててはならぬ、ということだったのである。もちろん、戴震の哲学を深く信じた段氏が、程朱と自己を一致させようとしていた、というのではない。だが義理と言えはただちに「宋の理学」を思い、別に自らの義理を主張しえないことは、段氏の当時に在って、旧套を脱することがいかに困難であったか、を如実に示しているよう。漢学はついに程朱の敵とはなりえなかつた。⁽³⁵⁾

以上、主要な先学の見解を概観してきた。「尊徳性」・「道問学」による解釈や、国家教学である理学との関係による解釈等、一部賛同しかねる部分はあるものの総体的には首肯できる説である。し

かしこれらはいずれも時代の思潮の中で段玉裁を捉えることにはある程度成功しているとはいえるが、段玉裁の置かれている環境から論及しているとはいえない。段玉裁の理学傾倒が個人的問題であれば、なんらかの原因がそこに介在しているといえないだろうか。したがって次章では段玉裁晩年における対人関係と環境を考察する。

三、 段玉裁晩年の対人関係と環境

乾隆五十七年以降段玉裁は蘇州に居を移し没するまで同地に住んだ。ここで中心になったのは『説文解字注』を完成させることであった。その様子は阿辻哲次氏の『漢字学』等に描かれている。⁽³⁶⁾これをみると『説文解字注』の完成は決して円滑に行われたものではなく、金銭面の問題、健康上の問題も重なり苦難の連続であったといえる。そこで段玉裁が理学に傾倒していく嘉慶十年前後の段玉裁は、如何なる状況に身を置いていたのであるうか。『年譜』をみていくと積極的に『説文解字注』の完成を目指す傍ら、他の著述や序文等を制作している。しかし、蘇州に居を卜したあたりから、段玉裁の健康状態は思わしくなかったようである。嘉慶六年の「劉台拱第二十九書」にもそのことが窺える。また段玉裁を不快にさせることもあったようで、同書簡には「謝氏の刻する所の荀子、其の中の校語は弟より出づ。別紙にて録し呈

さん」⁽³⁷⁾とあり、劉盼遂の「年譜」の後に附する「先生著述考略」に「二十四 荀子校定本 當時謝墉の刻本は先生の語を取るも、盡くは詳らかにせず」⁽³⁸⁾と記載されており、段玉裁は謝墉に自説を剽窃されたと憤ったようである。

嘉慶九年、「年譜」には嚴元照の次のような書簡が引用されている。

前に尊案の寄する所の某公の書稿を見るに、詞氣激直、大致は歐陽公の高司諫に與ふるの書に似たるも、歐公の論ずる所の者は、國事の是非。然る後の君子歐公に於いて疑義無きこと能はず。今先生の争ふ所は、之を歐公に較べ、其の大小何如。而して凌厲揮斥し、人をして手足を措く所無からしむ。傳に之有り、「凡そ血氣有るは、皆争心有り」と。之を受くる者豈に遂に能く此れに甘んぜんや。尊意は「彼は甘んぜずと雖も、吾何ぞ懼れること之有らん。夫れ懼るも懼れざるも、亦何ぞ深く論ぜんや。且つ顯要を懼れるに非ざるなり。儒者の謹厚の風を失ふを懼るのみ」と曰ふが若きも、更に此の事に就きて之を論ずれば、先生に在りては始めも亦之を輕信に失す。夫れ既に身は要津に據り、朋好と爲り著述を刊行せんと欲すは、固より艱大にして難勝の事に非るなり。苟も力の能く積む所に非ざれば、則ち竟に其の事を寝むは、何ぞ不可有らん。而して乃ち委曲躊躇すれば、募りて集事を助

くるは其の始めなり。此の如き又奚ぞ今日の事有るを怪し
 んや。然らば則ち先生の之を責むるや又已に甚だし。⁽³⁹⁾

これは嘉慶六年頃に段玉裁は「劉台拱第二十六書」において王紹蘭が『説文解字注』を刊刻することを約したことを記している。⁽⁴⁰⁾その後、段玉裁は王紹蘭がその約を反故にしたことに對する怒りを綴った書簡を本人に送ろうとしたらしい。これに對して嚴元照はその内容が、あまりにも激越なためこれをたしなめたのである。しかし、経済力に乏しい段玉裁にとっては期待していたこの話が、反故にされたことは裏切られた気持ちだったのであろう。

翌十年『小学』入手したことは前述した。嘉慶十二年、『説文解字注』を完成させる。

しかしこの年より有名な顧千里との論争がはじまる。この論争は翌年まで続くがここではここではふれない。ただし陳鴻森氏の「段玉裁年譜補訂」では段玉裁が論争を好む性格であったことを指摘している。⁽⁴¹⁾嘉慶十四年は『博陵尹師所賜朱子小学跋』を作る。またこのころには趙一清と戴震の両者の間に『水經注』の剽窃疑惑問題がおこり、段玉裁はその疑義を「与梁耀北論趙戴水經注」記し梁玉繩に送っている。嘉慶十五年、戴震が編纂した『直隸河渠書』を王履泰が内容を剽窃し、『畿輔安瀾志』と改題して勝手に刊行していることが発覚する。以上のように嘉慶六年より十五年までの段玉裁の身辺は論争・剽窃等の事件が頻発してい

る。段玉裁はこれらの事件を以て「郷に善俗無く、世良材乏しく、利欲紛拏して、異言誼戾す」と捉えて理学尊崇へと気持ちを傾斜させていったと考えられる。

前述した嘉慶十五年「与王懷祖第六書」で段玉裁は『孟子字義疏證』の刊行を述べているが、この件は晩年に至るまで構想していたらしく、『答程易田丈書』において程瑤田（一七二五〜一八一四）が戴震の『孟子字義疏證』は定本ではなく、『緒言』を以て定本とするという説に對し、段玉裁は様々な証拠を挙げて『孟子字義疏證』こそが定本であると主張する。そして末尾につきのように記す。

先生疑ふらくは緒言は定本爲りと、玉裁は未だ敢えて信ぜず。故に敬みて其の見る所を述べ、先生に復す。仍ほ疏證を將いて諸を呉中に刻さんと擬し、或いは兼ねて諸言を刻し兩ながら之を存さん。以て同學に持贈すれば、下士は必ず大いに之を笑うと雖も、傷み無きなり。吾が師の年譜一編略具はる、脱稿を俟ちて後呈政せよ。⁽⁴²⁾

この書簡では段玉裁は『孟子字義疏證』と『諸言』の両書の刊行を考えている。注目すべきは文中に「下士は必ず大いに之を笑うと雖も、傷み無きなり」とあり、戴震の『孟子字義疏證』が一般的には受け入れられないであろうと予想していることである。つ

まり段玉裁自身も戴震の義理の学は世間には理解され難いものと認識されているのである。書簡の書かれた時期について、耿加進氏は「年譜一編略具はる」という記述から嘉慶十九年の段玉裁八十歳の時の書簡としている。⁽⁴³⁾確かにその前後のことであることは間違いないであろう。要するに段玉裁の思想は考拠学を批判した後、理学一尊であつたわけではなく死去する寸前まで理学と戴震の義理の学を並存させる形であつたと考えられる。

おわりに

以上概観してきたように、段玉裁晩年の理學への傾倒は様々な解釈を生んできたといえる。晩年の段玉裁は『説文解字注』の完成に全力を傾注していたことは周知のことであろう。その努力の様子は劉台拱や王念孫宛の書簡を読んでいくとよく理解できる。そこには、果して『説文解字注』を完成できるのかという焦燥感と、更に病氣と経済的問題等の数多くの悩みをかかえた段玉裁の姿が窺える。これに前述したような嘉慶六年前後から頻発してきた人間関係によるトラブルも加わることにより、段玉裁の思想は考拠学から理学優位の方向へと変化していったのではないだろうか。しかし、段玉裁の晩年思想は単純に理学一尊へと傾斜したわけではなく、耿加進氏の指摘しているように、段玉裁は『説文解字注』完成後『孟子字義疏證』を研究しその思想にも賛意を示し

ている。それは嘉慶十五年頃であることは「与王懷祖第六書」を見ると理解できる。そこには理学の弊害を大とし、『孟子字義疏證』刊行することを述べられている。注意すべきはその後に続く文章で「義理を言う者をして折衷する所有らしめん」とあるように、理学との折衷を計る姿勢が感じられ、決して理学を全面否定しているわけではないのである。そして最晩年の嘉慶十九年、段玉裁の死の前年に陳寿祺宛の書簡中で理学尊崇を訴え、また、その一方で同時期と考えられる程瑤田宛の書簡では『孟子字義疏證』の刊行を述べている。一見すると矛盾するような段玉裁の発言はどのように解釈するべきであろうか。この問題を理解する鍵は程瑤田宛書簡に記されている。そこには『孟子字義疏證』を刊行したと仮定した後の事として「下士は必ず大いに之を笑うと雖も、傷み無きなり」と言う部分に注目すべきであろう。ここで段玉裁は戴震の思想が凡俗の徒には容易に理解できないことは当初より予測していたわけである。これらの事から考えるとやや戴震の思想ほうが理学より優位な位置を占めるともとれるが、要するに、段玉裁の最晩年の思想においては理学を戴震の『孟子字義疏證』により否定するものではなく、理学の一般的に人心を矯正する有効性は十分に認め、且つそれを推賞し、戴震の思想に理解有る人士には『孟子字義疏證』を読むことによりさらにその学を深めることを奨励したかったのではないかと考えられる。

注

(1) 吉田純 『清朝考証学の群像』 創文社 二〇〇六年 二七九頁～二八〇頁

(2) 段玉裁 『經韻樓集』 上海古籍出版 二〇〇八年 一九三頁 「嗚呼、此小學二本、乃我師博野吏部侍郎尹公元孚之所賜也。玉裁生六年、從先大父發蒙、七年、讀論語至南面章、先大父亡、八年、從叔祖父季遜公、讀書。九年、從先君子讀書。十年、從叔祖父可南公、讀書。十一年至十四年、乃從先君子讀書毘陵連江橋館舍。乾隆丁卯、余年十三、先君子授以小學、是年應學使者童子試、試之日能背誦小學四子書、詩·書·易·周禮·禮記·春秋左氏傳及胡傳、尹師謂孺子可教、賜飯、寵異之。試卷面呈、面許入泮、遂面授以新刻梁谿高紫超氏所注小學、奉書而歸、先君子及先孺人喜甚、線裝度閣惟謹、即此本是也」

(3) 前掲書 一九三頁 「蓋師之學宗朱子、尤重朱子小學、督學江蘇以培植人才爲先務、命諸生童皆熟小學爲養正之功、以坊間所行陳恭愍注未善、惟高氏注條理秩然、得朱子編輯本意、重刊頒布、而手畀玉裁也。師蓋有厚望焉、謂先君子曰、此兒端重、必教之成大器、勿自菲薄也。先君子教玉

裁、時舉此書。已而師薨於松江試院。玉裁至二十六、舉於鄉、入都、謁師令嗣亭山方伯、亦勤懇懇望以力學。顧不自振作、少壯之時、好習辭章、坐耗歲月。三十六、乃出爲縣令、不學而仕者十年、政事無可紀。四十六、因先君子已年過七十、請終養、未合例、遂引疾歸、趨侍二十餘年。癸亥、先君子見背、今又七年所矣。歸里而後、人事紛糅、所讀之書、又喜言訓詁考核、尋其枝葉、略其本根、老大無成、追悔已晚」

(4) 前掲書 一九四頁 「蓋自鄉無善俗、世乏良材、利欲紛拏、異言誼戾。而朱子集舊聞、覺來裔、本之以立教、實之以明倫敬身、廣之以嘉言善行、二千年賢聖之可法者、胥於是乎在。或以爲所言有非童蒙所得與者、夫立教·明倫·敬身之大義、不自蒙養時導之、及其長也、則以聖賢之學爲分外事、我所與知與能者、時義辭章科第而已矣。嗚呼、此天下所以無人材也。或又謂漢人之言小學、謂六書耳、非朱子所云也。此言尤悖。夫言各有當、漢人之小學、一藝也、朱子之小學、蒙養之全功也。子曰弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁。行有餘力則以學文。此非教弟子之法乎。豈專學文是務乎。朱子之教童蒙者、本末兼賅、未嘗異孔子教弟子之法也」

- (5) 前掲書 一九四頁 「玉裁自入都、至黔、至蜀、久不見此本、在巫山曾作家書上先君子、請檢寄之。先君子寄以他本、而夢寐間追憶在是。五年前乃於四弟玉立架上得之、喜極繼以悲泣、蓋痛吾師及吾父吾母之皆徂、吾父所以訓我、吾師所以鄭重付我者、委之蛛絲煤尾間、不克如趙襄子之簡、探諸懷中、愧恨何極。幸吾師之編尚存、吾父之題字如新、年垂老耄、敬謹繙閱、繹其旨趣、以省平生之過、以求晚節末路之自全、以訓吾子孫敬觀熟讀、習爲孝弟、恭敬以告天下之教子孫者、必培其根而後可達其支、勿使以時義辭章科第自畫也。此則小子微意也夫」
- (6) 劉盼遂 「段玉裁先生年譜」 『經韻樓集』所收 上海古籍出版 二〇〇八年 四七四頁
- (7) 陳鴻森 「段玉裁年譜訂補」 『中央研究院歷史語言研究所集刊』第六十本 第三分所收 一九八九年 六三三頁
- (8) 段玉裁 『經韻樓集』四一六頁 「弟落魄無似、時觀理學之書。說文注近日可成、乞爲作一序。近來後進無知、咸以謂弟之學竊取諸執事者、非大序不足以著鄙人所得也」
- (9) 吉田純 『清朝考証学の群像』 二七六頁
- (10) 吉田純 前掲書 二六八頁
- (11) 段玉裁 『經韻樓集』三〇〇頁 「顏氏家訓曰、今有讀數十卷書、便自高大、陵忽長者、輕慢同列、人疾之如讎敵、惡之如鸚梟、如此以學求益、今反自損、不如無學也。子朱子小學取之。顧涇陽誨錢牧翁曰、汝自謂讀書多我、有書二本汝卻未讀、乃小學也。未有無人品而能工文章者。足下姑讀小學」
- (12) 陳鴻森 「段玉裁年譜補訂」 六三八頁 「執事倘解組南歸、徜徉至蘇杭、猶可聯床風雨、共談所得也。今日之弊、在不尚品行政事、而尚剿說漢學、亦與河患相同、然則理學不可不講也、執事其有意乎」
- (13) 段玉裁 『經韻樓集』一九二、一九三頁 「抑余又以爲考核者、學問之全體、學者所以學爲人也、故考核在身心性命倫理族類之間、而以讀書之考核輔之。今之言學者、身心倫理不之務、謂宋之理學不足言、謂漢之氣節不足尚、別爲異說、簧鼓後生、此又吾輩所當大爲之防者、然則余之所望於久能者、有志於考核之大而已矣」

- (14) 段玉裁 前掲書 四一八頁「東原師曾與弟書云、僕生平著述、以孟子字義疏證爲第一、所以正人心也。今詳味其書、實實見得宋儒說理學其流弊甚大、閣下可曾孰之覆之、弟擬刻此書以廣其傳、俾言義理者有所折衷」
- (15) 前掲書 二三七頁「吾師原善・孟子字義疏證恭案几上」
- (16) 錢穆 「讀段懋堂經韻樓集」 『中国學術思想史論叢』 (八) 所収 一九八〇年 二七一頁 錢氏の右の論文の初出は一九七六年である。したがってこの時点でこの結論に達したと考えられる。
- (17) 耿加進 「段玉裁晩年之悔原因考析」 『宏徳學刊』 (第一輯) 所収 二〇一〇年 二七〇頁
- (18) 陳寿祺 『左海文集』 卷四 道光年間刊 五十葉 「在棗洛閩關中之學、不講謂之庸腐。而立身苟簡、氣節敗、政事蕪、天下君子而無眞君子、未必非表率之過也。故專言漢學、不治宋學、乃眞人心世道之憂。而況所謂漢學者、如同畫餅乎。(中略) 執事主講宜與諸生、講求正學氣節、以培眞才、以翼氣運。
- (19) 蘇瑩輝 「跋澂秋館舊藏段若庸先生手札——兼述段氏晩年學術思想」 『故宮季刊』 第十三卷 第三期所収 一九七九年 十三頁
- (20) 皮錫瑞 『經學歷史』 中華書局 一九八一年 三一三頁「戴震作原善・孟子字義疏證、雖與朱子說經抵牾、亦只是爭辨一理字。毛鄭詩考正嘗采朱子說、段玉裁受學於震、議以震配享朱子祠(中略)段以極精小學之人、而不以漢人小學薄朱子小學。是江・戴・段之學嘗薄宋儒也。宋儒之經說雖不合於古義、而宋儒之學行實不愧於古人。且其析理之精、多有獨得之處。故惠・江・戴・段爲漢學幟志、皆不敢將宋儒抹殺」
- (21) 江藩 『国朝漢學師承記』 中華書局 一九八三年 一五四頁 「六經尊服・鄭、百行法程・朱」
- (22) 錢穆 『中国近三百年學術史』 (上) 中華書局 一九八四年 三六七頁
- (23) 錢穆 「讀段懋堂經韻樓集」 『中国學術思想史論叢』 (八) 所収 一九八〇年 二七一頁

- (24) 段玉裁『経韵楼集』二二六頁「余自幼時讀四子書、注中語信之惟恐不篤也。既壯乃疑焉、既而熟讀六經孔・孟之言、以覈之四子書注中之言、乃知其言心、言理・言性・言道、皆與六經孔・孟之言大異。六經言理在於物、而宋儒謂理具於心、謂性即理、六經言道即陰陽、而宋儒言陰陽非道、有理以生陰陽乃謂之道。言之愈精而愈難持」
- (25) 余英時「清代思想史的一個新解釈」『論戴震與章學誠』所収 東大図書公司 一九九六年 三七四頁
- (26) 蘇肇輝「跋激秋館舊藏段若庸先生手札——兼述段氏晩年學術思想」十七頁
- (27) 龔自珍『龔自珍全集』上海古籍出版 一九九九年 一九三頁「孔門之道、尊德性、道問學、二大端而已矣」
- (28) 張循「漢學的内在緊張 清代思想史上漢宋之爭的一個新解釈」『近代史研究所集刊』六三期所収 二〇〇九年 六二頁 ここで引用されている阮元の書簡には「近之言漢學者、知宋人虚妄之病、而於聖賢修身立行之大節略而不談、以遂其不矜細行、乃害於其心其事」とある。
- (29) 張循 前掲書 六二頁
- (30) 張循 前掲書 六二頁
- (31) 耿加進「段玉裁晩年之悔原因考析」二七〇頁
- (32) 耿加進 前掲書 二六九頁
- (33) 吉田純『清朝考証学の群像』二九三頁
- (34) 井上進『明清學術變遷史』平凡社 二〇一一年 二八五頁
- (35) 井上進 前掲書 二八六頁
- (36) 阿辻哲次『漢字學』東海大学出版 一九九二年 一九五頁～二〇一頁
- (37) 段玉裁『経韵楼集』四一三頁「謝氏氏所刻荀子、其中校語出於弟者、別紙録呈」「年譜」はこの書簡を嘉慶七年とするが、陳鴻森氏の「段玉裁年譜訂補」は嘉慶六年とする。

(38) 段玉裁『經韻樓集』四九〇頁「二十四 荀子定本 當時謝塘刻本取先生語不盡詳」

中、或兼刻緒言兩存之、以持贈同學、雖下士必大笑之、無傷也。吾師年譜一編略具、俟脫稿後呈政」

(39) 段玉裁 前掲書 四七二頁 「前于尊案見所寄某公書稿、詞氣激直、大致似歐陽公與高司諫之書、歐公之所論者、國事之是非、然後之君子於歐公不能無疑議、今先生之所爭、較之歐公、其大小何如、而凌厲揮斥、今人無所措手足。傳有之、凡有血氣、皆有爭心、受之者豈遂能甘此。尊意若曰、彼雖不甘、吾何懼之有。夫懼不懼、亦何足深論、且非懼顯要也。懼失儒者謹厚之風耳。更就此事論之、在先生始亦失之輕信、夫既身據要津、欲爲朋好刊行著述、固非艱大難勝之事也。苟非力所能積、則竟寢其事、有何不可。而乃委曲躊躇、募助集事其始也。如此又奚怪有今日之事乎。然則先生之責之也又已甚矣」

(40) 段玉裁 前掲書 四一一頁 書簡には「有經術吏治之王紹蘭、官閩中、已陞知州、許刻說文、當先刻數本」とある。

(41) 陳鴻森「段玉裁年譜訂補」六三七頁

(42) 段玉裁『經韻樓集』一八四頁 「先生疑緒言爲定本、玉裁未敢信、故敬述其所見、以復於先生焉。仍擬將疏證刻諸吳

**The problem of veneration
Li learning in Duànyùcái's later years**

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi

807-8586, Japan

No English abstract